

### NPOとの協働による島嶼部で不足する公共的サービスの供給や 商品開発、定住促進

#### 【取組の概要】笠岡諸島の島民が一つになり、島専属の市職員と協働して、 ハンデキャップを克服した島づくり

瀬戸内海に浮かぶ30有余の島々からなる豊かな自然に恵まれた笠岡諸島。その諸島に点在する7つの有人島には、人と人が助け合いながら島づくりに取り組み、生き活きと暮らす島民たちがいる。

笠岡諸島の島では地理的条件などのハンデキャップにより、過疎化や少子高齢化が著しく進んできた。しかし、島を愛する若者たち、女性たちが立ち上がり、7つの島が手をつないで一致団結して島を元気にして行こうと活動を始めた。1998年から毎年、島民や島外の島出身者が数千人集結して開催する全島合同の「島の大運動会」は、笠岡諸島のシンボルプロジェクトとなった。

一方、笠岡市では2001年から、島民の叫びに応えようと「島おこし海援隊」を編成し、「島民になれ」との市長の特命のもと、市職員を島々に派遣して、島の住民の一員ようになって島民たちと一緒に島おこしの活動に取り組んできた。島民たちの生活の困りごと一つ一つに耳を傾け、情熱と工夫で解決していった。



笠岡諸島・真鍋島の港

2002年からは島民たちが、7島全体を一つの会社組織のようにして、島民全体で助け合いながら島づくりをやって行こうと、島民組織「<sup>かいしや</sup>電腦ふるさと島づくり海社」(後に、「NPO法人かさおか島づくり海社」に改組)を立ち上げた。以来、島民たちの「島づくり海社」と市の「島おこし海援隊」は、島を元気にしたいという夢を同じくして、様々な島づくりに連携・協働して取り組んできた。島を担う新たな人材を島に呼び込もうとする島民主体の「空き家対策事業」、豊かな島の食材を活かして観光資源にしたり、地域の食のサービス供給を図る「<sup>しまべん</sup>島弁」、診療所への高齢者の足の確保を図る島内バス「過疎地有償運送事業」、島の高齢者の生活を支えるための島民の手による「介護サービス事業」、島の将来を担う子どもたちを育てようと市からの受託で実現させた「保育施設の開設」、高齢者が元気で働けるようにした「ゴーヤの生産・販売」など、新たに取り組む島づくり事業は無限に広がっている。

島が持つハンデキャップを克服し、「過疎化、超少子高齢化の島から、多くの人が生き活

きと元気で暮らす島に変えて行こう」とする島民たちと市職員たちの島づくりはこれからも続く。

## 1. 笠岡市と笠岡諸島の概要

### **島々の豊かな自然と過疎・超少子高齢化**

笠岡市は、岡山県の西南部に位置し、市の西側の広島県福山市に隣接する陸地部と南側の笠岡諸島からなる。笠岡諸島のうち高島、白石島、北木島、飛島（大飛島、小飛島）、真鍋島、六島の7つの島に人々が暮らしている。島々は自然に恵まれ、海の幸山の幸ともに豊かな天然資源を生み出しており、人と人が助け合う温かいつながりが残っている。

市の人口は、55,424人(2008年10月1日現在、笠岡市住民登録人口)、高齢化率は29.1%、年少人口率(15歳未満)は12.0%となっている。それに対して、笠岡諸島の人口は、戦後の最盛期には全島合わせて10,000人を超えていたが、現在は最盛期の4分の1近くに激減して2,589人(同)となっており、過疎化が著しい。また、高齢化率は58.1%にも上る一方、年少人口率はわずか4.2%と低く、超少子高齢化の状況にある。

### **諸島としてのハンデキャップ**

市の陸地部へのアクセスは、鉄道で福山市から15分ほど、岡山市からは45分ほどである。笠岡諸島へは陸地部の笠岡港(又は伏越港)から定期航路(高速船・普通船・フェリー)があり、各島に1日2便~12便(所要時間20分~70分ほど)の船が出ている。小中学校は笠岡諸島内にあるが、高等学校は島内にはなく、高校生になると陸地部の学校に定期航路を使い通学するか、島を離れて下宿する。また、島民の中には、陸地部に通勤する人もおり、買い物については陸地部に行く人も多い。島内の交通は殆どが徒歩で、面積が大きい北木島などで車が使われている。

点在する7つの有人島が市域となっている事情から、海上交通、港湾整備、医療・福祉環境、教育環境などにおいて、一島一自治体の地域以上にハンデキャップが常にあり、それらを一一つクリアして島の活性化を進めていけるように、住民と市が連携しながら地道な取組を展開している。

## 2. 笠岡諸島の交流から始まった新たな島づくり

### **島の若者たちが立ち上がった**

笠岡諸島の島では、離島としてのハンデキャップを抱え、過疎、超少子高齢化が進展する中、7つの島の若い有志たち(若いと言っても40~50歳代)が集まって、「このまま何

もしなかったら、島は沈没してしまう。笠岡の島同士が協力し合って島を再生していこう」と呼びかけあって、1997年6月、「島をゲンキにする会」を立ち上げた。夜な夜な酒を飲みながら、「島をどうしたら元気にできるか。島に何が必要か」について、話し合い続けた。議論を進める中で、それぞれの島の者がお互いの島のことをほとんど知らなかったことが改めて分かった。そこで、「島同士でお互いに知ることからはじめよう。訪問し合っ、島同士で島民みんなと一緒に参加してやれることを何かしよう」という話になった。

## 島同士の連携を高めた「島の大運動会」

その頃まで、笠岡諸島の各島では、島外とのつながりは陸地部ばかりで、島同士のつながり、島民間の交流がほとんどなかった。そこで、7つの島同士がつながり、連携を高めて一緒に島おこしが出来るものとして、7島合同で「島の大運動会」を開催することになった。



島の大運動会

「島の大運動会」は、島民が企画提案し市が事業支援するというものである。名前については企画・採択の段

階では「島<sup>しま</sup>オリンピック in 笠岡」としていたが、開催が決まり島民たちで実施に向けて話し合う中で、1人のお年寄りから「オリンピックをもじって横文字を使うよりも、“島の大運動会”の方がよっぽどいい」との意見が出て、名前を変えたいきさつがあった。

1998年5月、「島をひとつに 心をひとつに」というテーマを掲げて、北木島を会場に「島の大運動会」が開かれた。各島のほとんどの島民たちが北木島に結集したため、「運動会が行われた北木島以外の島には、猫しか残っていなかった」と言われている。7島の全島民はもとより、島を離れ本土に移り住んでいる島出身者なども含めて5,000人ほどの人たちが参加した。運動会では、各島の島民たちが団結し、島同士で競い合い、ふれあい、諸島全体の団結心も生まれ、笠岡諸島全体が燃え上がった。

島で生きる若者たちの「島を活性化させよう」という熱い思いで繰り広げられるこうした取組に対して、市では、「島の住民が考え、行政が支援し、協働して島おこしを実践していく」という方向の重要性を再認識したという。

島に住む小さな子どもから、80～90歳のお年寄りまで島を上げての大運動会は、その後、島民皆が楽しみにしている毎年の行事となった。翌年の白石島に続き、真鍋島、高島、飛島、六島と、各島順番に持ち回りで開催され、これまでに11回開催されている。最初ほどではないが、毎回1,000人を越える参加がある。

## 女性たちの活躍とネットワークの立ち上げ

第1回目の「島の大運動会」が盛り上がりつつある中で、島の女性たちから「私たち女性もお手伝いするだけでなく、最初の企画から運営まで全般に積極的にかかわりたい」との

声が上がってきた。運動会では、男性ばかりが実行委員を務め、男性たちが決めたことを女性たちが裏方で手伝うという形だった。そこで翌年 1999 年に開かれた第 2 回目の「島の大運動会」からは、女性たちも実行委員に加わり、競技のことからバザーや昼食のことに至るまで、企画の段階から意見を言い、運動会を盛り上げるために積極的に関わって行った。

そして、この運動会の開催のために女性たちが協力、団結したのがきっかけとなって、1999 年 5 月、女性ネット「笠岡諸島 生き生き会」が立ち上がった。その後、生き生き会の女性たちは、島づくりにおいて女性にできることは何かを考え、良いことだと思ったことは次々と行動を起こしていった。2001 年 1 月には、笠岡諸島全体の女性を対象にアンケート調査をして、島の生活、仕事、保健福祉、生きがいなど様々な分野から女性なりの意見を集め、それを「笠岡諸島振興計画」（後述）にも反映させた。

### 3. 市が笠岡諸島に派遣した「島おこし海援隊」

#### **島民の叫びへの応えから生まれた「島おこし海援隊」**

第 2 回目の「島の大運動会」における一つのプログラムとして、「島の討論会」が行われた。その討論会の中で島民たちが、出席していた市の助役（現市長）らに対して主張した。

「島にはいろいろハンデがあるが、それを何とかして克服して島を元気に行こうと島民は思っている。やる気のある人間はたくさんいる。島には良さ、強みもあり、エネルギーを島はたくさん持っている。けれども、島のみんなのために頑張っている人でも、どうしても日々の生活があって片手間でやらざるを得ない。専属ではできない。だから、島には、専属で中心になってやる人、事務局になる人が必要なんだ。市は財政投資を島にするよりは、そうした専属で事務局をやるような“人材”を投入してくれた方が非常に効果的で助かる」、「市は陸から眺めるだけでなく、島の人と一緒に汗をかいてサポートして欲しい。僕らが役所に行くのでなく、役所が島に来てくれ。」

現市長はこの島民の主張を重く受け止め、島に島民のサポートをする市職員を派遣し、そこで島民と交流する中で声を受け止め、島の力を引き出そうという施策のアイデアを実施に移すことにした。市では、2001 年 4 月に、海や島で活躍する人を応援する部隊ということで「島おこし海援隊」（以下、海援隊）と名付けたチームを編成した。この島専属の応援チームは、島に拠点を置き、住民の 1 人のようになって、住民たちと共に汗を流して島おこしを行っていくものであった。

海援隊を編成するに当たって、「隊員」になりたいと希望する情熱を持った職員を庁内で公募したところ、何人かが論文を出して応募してきた。市長が直接面接をして 3 名を隊員に選んだ。選定の基準は、海援隊の成否に関わる点として、島民の思いが理解でき、骨身を惜しまず、島民たちと一緒に頑張って頑張る気概があるかどうかだった。市長は、決意を持って手をあげた 3 人の“隊員”に対して、特命として「島民になれ。市職員としては

なく、島の住民となって働いてくれ」との一言を伝えた。市長直轄でどこの部局にも属さない、上司もいない、予算もない。予算が必要なら、関係課に掛け合えというもので、隊員たちのプレッシャーはすごいものだったという。

## 歌手の“本家”海援隊が島に来て、島民の認知を高めてくれた

市長直轄組織として海援隊を立ち上げてすぐ、ホームページで連絡先を調べて、歌手の「海援隊」の武田鉄矢<sup>たけだてつや</sup>氏に手紙を送った。「島おこしをやろうと、同じ名前で『島おこし海援隊』という組織を作りました。笠岡の近くに来たら、寄って下さい。」すると、3～4日後に事務所から電話があった。「5月26日、府中市に講演に行くから」と。当日、武田氏を迎えに行き、北木島の体育館に招くと、北木島の全島民が待っていた。武田氏は快く歌を歌ってくれて、島民たちは大感激し、大いに盛り上がった。

この出来事が、市職員3人の海援隊に対する島民たちの認知を広げ、いい船出となった。

## 島民の「島おこし海援隊」への信頼感と自治意識の高まり

海援隊の3人の隊員たちは、自分の持ち味を生かしてそれぞれに役割を見つけ出し、様々な形で島おこしに取り組み始めた。島のいろいろな会合に出て、昼夜を問わず島の住民の1人として考え、問題を見つけると、本庁の各部局にそれをつないで解決へと導こうと、日々奮闘していった。

隊長の市職員（城戸<sup>きと</sup>氏）は、主に島の産業おこしを担当し、島の特産である石材の販路を求めて全国を回ったり、シーカヤックなど観光資源を掘り起こして、岐阜、長野など海を持っていない地域の学校から修学旅行を誘致し、笠岡諸島全体に展開するために奮闘した。

中隊長の市職員（守屋<sup>もりや</sup>氏）は、離島という地理的条件などのハンデキャップを克服するために、島の情報化をめざして奮闘した。連日連夜、島々を飛び回り、高齢者にパソコン教室を開いた。その甲斐あって、笠岡諸島では70～80歳の高齢者でもインターネットを使いこなしている。また中隊長は、島の情報誌「しまかぜ」を発行したり、ホームページで島情報を次々と発信し、インターネットを活用した島外の人たちとのネットワークづくりにも取り組んだ。

隊員が夜遅くなり、陸地部に帰れなくなった時には、パソコン教室の高齢者たちが自分のお金を出し合い、船をチャーターするなど、隊員たちと島民の間の信頼関係は厚くなっていった。

小隊長の市職員（重見<sup>しげみ</sup>氏）は、まず島の一人ひとりの小さな困りごと、ニーズを知るところから始めようと、最初に島中のすべての世帯に戸別訪問をして、生活相談を行った。家の手すりを取り付けたり、植木の木を切ったり、各戸を訪問して、悩んでいる人に“島民”として献身的にサポートした。高齢の島民から「港に行くのに交通手段がないから困

っている」と聞くと、ミニタクシー（北木島での運転ボランティアによる送迎事業）を立ち上げ、港に車イスや担架を設置し、坂道には手すりをつけた。島に医者がないため困っている高齢者が多いことから、陸地部の医者に頼んで、月2回だけが訪島診療を実現させた。こうした相談対応は、まさに、「島のよろず相談員」そのものだった。

海援隊の取組は、計画性を持ったものではなかったが、目の前の困っている人、困っていることを情熱とアイデアでサポートし、生活に根ざした課題を一つ一つ解決していった。また、こうした島での海援隊の取組を、市の本庁職員たちがバックアップしていった。

島民たちは、海援隊による支援を喜び、感謝し、それにより元気になっていき、ますます期待感を持った。自ずと島民と市職員（隊員）との間に信頼関係が生まれていった。

そして、島民からは、「何もかも海援隊任せでいいのか。自分らでやれることは自分らでやった方がいいのでは」との声が出るようになった。

#### **4. 笠岡諸島まるごと起業した「NPO法人かさおか島づくり海社」**

##### **笠岡諸島を一つの会社のようにして、島民みんなで元気になろう**

若者たちによる全島合同の「島の大運動会」が毎年盛大に開かれ、女性たちのネットワークも広がるようになり、さらに市が島に海援隊を派遣する中で、2002年3月、島民たちと海援隊の隊員が一緒になって、「笠岡諸島振興計画」を策定した。この計画づくりが島民たちの意識を高め、その後の様々な活動を展開し活発化させる契機の一つとなった。

また、島民たちが、島の将来を考え話し合いを進める中で、「笠岡諸島の7島全体を一つの会社組織のようにみなし、島のために働けば何らかの利益が上がるという仕組みを作ろう。利益が上がることで島民たちがどんな取組にもより積極的に関わるようになり、生きがいも感じられるようになる。そうすれば、島民みんなが生き生きと輝くような島づくりができるのではないか。だから、運動会だけでなく、あらゆる島づくりを7島合同でやろう。そのための組織を立ち上げよう」といった構想が生まれた。

2002年8月、笠岡諸島の島民たちは、7島それぞれの特徴を活かしながら島づくりをする島民組織（任意組織）「**電脳笠岡ふるさと島づくり海社**」を立ち上げた。組織の体制は、島民全員が社員メンバーとなり、北木島に統括する本社を置き、各島にはそれぞれ支社を置くという仕組みである。

各島支社が島づくりの事業を計画し、それを本社会議で議論して決定するというものである。事業が決定されると、本社が事業費を支給するが、支社は支給を受けた事業費の3割を5年間で本社に返済する仕組みとなっており、収益事業を行い自立していく動機付けとなっている。当初企画の段階では「(島づくり)会社」という表現であったが、市の中から、「株式会社でないのに会社という表現を使っていいのか。ストレートすぎないか」といった意見があり、島民と海援隊が知恵を絞って、「海社」と書いて「かいしゃ」と読むようにした。

その後、2006年9月には、NPO法人格を取得して、「特定非営利活動法人かさおか島づくり海社」（以下、島づくり海社）と名前も新たに発展的に組織を改めた。

## **5. NPOと行政の協働による島づくりの展開**

### **（1）様々な島づくり事業の展開**

#### **島づくり海社と海援隊の協働で島づくり**

島づくり海社では、多種多様な島づくり事業を展開してきたが、特に笠岡諸島が抱える深刻な課題である過疎化、超少子高齢化に対応した事業や、島民の生活を支えるための事業を中心に、市の海援隊と連携・協働しながら取り組んできた。

人口流出に歯止めをかけて、島を担う新たな人材を島に呼び込もうとする「空き家対策事業」（後述）、豊かな島の食材を活かして観光資源とするとともに、地域の食のサービス供給機能を高めようとする「島弁」（後述）などのほか、次のような事業を展開してきている。

#### **高齢者の診療所への足の確保 ～過疎地有償運送事業～**

笠岡諸島の中でも面積の大きい北木島では、高齢者の交通手段の確保が長年に渡り課題となっていた。島の高齢者からの「診療所に行くためにバスを走らせて欲しい」との声が日増しに高まり、島づくり海社は、2004年12月から海援隊などと具体的な協議を行い、2005年2月には、「笠岡市北木島地区過疎地有償運送事業運営協議会」を立ち上げた。

その後、島づくり海社がNPO法人格を取得し、2006年9月に北木島内限定で「過疎地有償運送事業」の申請・登録（中国運輸局）を経て、同年10月から島内バスを運行できるようになった。バスは診療所の開設日に合わせて、週に3日（月・水・金）、1日3便を運行している。2007年度のバスの利用者は1,939人（毎月110～230人）となっている。

#### **島民の手による介護サービス事業**

島づくり海社の女性たちは、以前から、島の高齢者の生活を支えるために、「島でデイサービスをやりたいね」とよく話していた。介護サービス事業を島民の手でやるためには、バスの運送事業と同様に、法人組織が必要だった。そこで、島づくり海社がNPO法人格を申請するのを機に、2006年8月から本格的に話し合いを始め、準備に取り掛かった。翌2007年2月には、介護保険事業に参入することができ、北木島において個人所有の民家（空き家）を改築して、通所介護事業所「海社デイサービスほほえみ」を開所した。

40～70歳代の島民7人がスタッフとなり（大半がヘルパー2級の資格を持つ）、週4日、開設している。介護サービスの対象は、北木島在住の要介護認定者で、1日当たりの定員



は10人。入浴、歩行訓練、ゲームや歌などを楽しんでもらっている。これまで民間による介護事業がなかった島に、島民自らが介護施設を立ち上げて運営できるようになった。さらに2009年1月には「海社デイサービスすみれ」（週3日開設、定員10人）も開所した。



海社デイサービスほほえみ

## 島の将来を担う子どもたちを育てよう ～保育所の開設～

陸地部から最も遠い位置にある六島では、2003年に児童の減少により小学校が休校していたが、2006年に就学前の子どもが4名いたことから、保育所の設立を望む声が上がった。そこで、島民たちは島づくり海社を通じて市に要望をし、2006年4月に市から委託を受ける形で「六島あゆみ園」を設立し、就学前の子どもを受入れた保育サービス 시작했다。翌2007年には、そのうちの1人が新1年生に上がったことから、5年ぶりに六島小学校が再開した。

## 高齢者が元気で働き続けられる環境づくり～栽培が楽なゴーヤの生産・販売～

真鍋島は、花の島として名を馳せて寒菊の栽培が盛んに行われていたが、高齢化とともに栽培農家が減少してきた。そこで、2001年頃から寒菊に替わる作物として栽培が簡単なゴーヤの生産を始めた。ゴーヤは年をとった高齢者でも楽に栽培できることから、高齢者も島の担い手として今も元気に働いている。現在では、島の特産品として県内一の生産地となっている。

また、島づくり海社では、島の高齢者が栽培したゴーヤを使って新たな商品開発ができないかと考えた。ゴーヤの加工品の試作を繰り返し、「ゴーヤうどん」「干しゴーヤ」「ゴーヤジャム」「ゴーヤ飴」等の商品化を行った。島に来た観光客はもとより、2007年9月に笠岡駅前商店街一角にオープンした笠岡諸島特産品のアンテナショップ「ゆめポート」などでも販売している。



アンテナショップ「ゆめポート」

## (2) 島の新たな担い手を呼び込む「空き家対策事業」

### 宿泊客の夢の一言「こんな島で暮らしたい」を形にした空き家活用

2002年12月、島づくり海社の高島支社では、島民たちが島の活性化のための事業を新たにどのように展開していくのかの検討をしていた。そうした中、高島でペンションを経営



していた高島支社の役員は、宿泊客から「定年になったらこんな島で暮らしたい」という声をよく聞いており、「島の空き家を活用して、外から人を呼び寄せられないか」と考えた。島出身の若者にUターンを呼びかけても手ごたえがなく、島の将来に危機感を抱いての考えだった。

2003年6月頃、高島支社では、高島の空き家の所有者に「家を貸してくれないか」という呼びかけのアンケートを送った。すると、所有者約50数人の回答はすべて不可だった。「盆や正月に帰るから」、「定年になったら帰るかもしれないから」などが、その理由だった。小さな島々では、地域での現状が外に伝わりにくく、島を出て本土へ転居しても空き家のままにして売却や賃貸はしないのが普通だった。

しかし、その役員は諦めず、2003年10月に、自らの親戚関係に頼んでその所有物件から4軒の空き家を確保した。そして、市の海援隊に連絡をして「空き家を4軒確保したから、インターネットなどで移住希望者を募集して欲しい」と頼んだ。

その役員と海援隊は、物件の写真を撮り、間取り図を描き、補修は入居者負担で家賃は月1万円といった入居条件を話し合い、その上で、すぐに「島づくり海社」のホームページで広報を始めるとともに、市や県などに募集チラシを配布した。

## 島に初めての移住者がやってきた

3か月後、テレビ局から取材が入り、2004年1月にバラエティ番組で募集情報が全国に放送された。すると、放送翌日から1ヵ月間、役員の電話が鳴り続け、下見希望者が島に押し寄せてきた。役員をはじめ高島支社の社員（島民）たちは、下見希望者を一人ひとり港に出迎えて案内をし、島の生活のことなどを熱く語った。一人ひとり丁寧に対応し続け、問合せは80件、下見は40件にも及んだ。

2004年2月には、移住第1号となる家族が高島へ引っ越してきて、島民あげて大歓迎した。しかし、島では初めての移住受入ということで、島民たちは何から手をつければいいのか分からず、借りる物件の内部の整理や周りの清掃、当日の引越し要員と運搬車の確保、引越し業者や運搬フェリーの確保、報道機関の連絡調整など、試行錯誤の連続だったという。

引越し当日は、高島の島民20人が港で引越しのフェリーを待ち、港から荷物を小型の運搬車に詰め替えて家まで運んだ。その後、引っ越してきた家族は、島で仕事をし、島の人と結婚するなどして、島の一員となって生活している。

移住第1号の家族に続いて、半年足らずで残りの3物件にも移住者が決まり、高島の空き家では新たな生活が始まった。

この時の高島支社の役員たちの取組から生まれた「全ての面で支援する」というノウハウが、その後の笠岡諸島全体の空き家対策事業にも引き継がれていった。

## 希望者が殺到した「空き家巡りツアー」

この高島の空き家が埋まっても問合せは依然続き、理事長の住む北木島、副理事長の住む真鍋島、そして白石島へと役員尽力によりその取組は少しずつ広がっていった。

空き家対策では、各島支社が個別にそれぞれの方法で取り組んでいったが、2006年1月には、各島支社が協力して「空き家巡りツアー」を企画した。1泊2日の日程で、チャーター船で白石島と真鍋島に渡って空き家と島内を見学し、真鍋島で宿泊して先輩移住者や島の専門家の話を聞き、翌日は北木島を見学して先輩移住者が経営するレストランで昼食をとるというツアーだった。1か月前に募集を始め、募集10人に対して50人近くの応募があり、定員を30人に増やすほどの人気となった。ツアーは空き家事業の宣伝になるだけでなく、島民が島を見て回るツアー客たちを見て、「自分たちの島にはこんなに住みたいと思う人がいるのか」とあらためて感じて、自分たちの島を見直す機会ともなった。

また、この「空き家巡りツアー」を実施する直前1週間前に、テレビの番組で月10万円で豊かに暮らせる島があるとして、笠岡諸島の移住受入のことが放映された。すると、翌日から問合せが殺到し、事務局では1か月近く電話が鳴り止まなかった。問合せの数は400件にも上り、先のツアーとは別に、1月下旬から3月までの間に新たに5回のツアーを急ぎ企画し、最終的に全国から88人の参加があった。

## 島民たちの島への情熱が移住者を呼び寄せた

2006年2月下旬に、月10万円で豊かに暮らせる島のテレビ番組を見たというある男性から、問合せの連絡が入った。その男性は寿司職人で夫婦と子どもの家族での移住希望だった。そこで、「島弁」（後述）の担い手となる料理人を探していた「島づくり海社」の女性役員が対応することになった。その役員は、2005年に笠岡諸島で開発した「島弁」を常時製造・販売できる施設として、「マナコッチハウス」を建設している真鍋島の島民だった。真鍋島では初めての家族の受入れだったことから、「来てくれることはうれしいが、直ぐに帰るのではと思っていた。下見と言っても、島への交通費はかなり高くかかるため、来てくれる限りは、島では出来るだけのことはしたいと思った」と島民は話す。

移住希望で下見に来た男性は、「とてもありがたいな」と感じたという。「つながりは何にもない見ず知らずの他人なのに、（自分を）泊めてくれて、晩御飯を作ってくれ、島の同世代の親や漁師の人たちを呼んで歓迎会をしてくれて、こんなに良くしてもらっているかな。うれしいな」と思ったという。こうした思いがあったこともあり、島への下見の時点では、島には空き家がなく住める家の確保が出来ておらず、働ける仕事先もまだない状況であったが、下見に来た男性は、「できたら移住したい。でも本当に来れるのかなあ」と感じたという。

※「マナコッチ」とは、真鍋島のマスコットの名前。

その後、島民たちは、男性の家族に何とかして移住してもらおうと、懸命に島内に空き

家を探した。真鍋島では子どもが少なく学校の維持が困難を極めていたことから、子どものいる家族の移住は悲願だった。そして、1か月後、市と交渉をして小学校の旧教員宿舎だったところを住めるように改装の段取りをした上で、下見に来た家族に「住むところできましたよ」と伝えた。そして、「住むところがあるなら、とにかく移住しよう」ということになった。

働く場所については、「島弁」（後述）を作る予定の「マナコッチハウス」で働きませんか、島民の方から提案をした。移住してきた男性も、採算が合うかどうか見通しが立ってはいなかったが、素材が豊かな島で寿司職人としての腕を活かせるならと島でその仕事で生計を立てることを決めた。「皆さんの島を良くしたいという情熱をすごく強く感じた。そういう人たちがいるところだから、悪いところではないと思った。観光客がどんどん押し寄せるところでなく、島の静かなところも良かった。作られたものでなく、昔ながらの島の街並みが残っているところもいいと思った」とその男性は話す。

その後は、マナコッチハウスを建設している島民と移住してきた男性が力を合わせて、「島弁」をはじめ、島の高齢者向けの週2回の弁当サービス、マナコッチハウスでの昼食サービス、法事の仕出し、おせち料理、あるいは独自に開発した真鍋バーガー（真鍋島沖でとれた新鮮魚介のすり身をフライにしてパンにはさんだご当地バーガー）など、考えられる食事サービスを次々と展開して行った。



マナコッチハウス

## 移住者が増え、7割が島に定着

笠岡諸島では、2002年に高島の島民が空き家対策事業を始めて以来、これまでに26世帯、61名（2009年3月現在）が笠岡諸島に移住した。その後も島での生活を送っている人は、17世帯、38名で、定着率は62%となっている。

空き家対策事業を繰り広げる「島づくり海社」の島民たちを見ていて、海援隊の隊員は次のように感じたと言う、「地元の島民が島の将来を考え、熱い思いを持って自ら島のために活動しているからこそ、本当に地域に欲しい人材が確保できたんだ。空き家対策事業を実施して以来、島民たちの意識も大きく変わった」。

### (3) 島の食材を活かして商品開発した「島弁」

#### 「島弁」でモノづくりの楽しさを知った

2005年2月、テレビ局から「島づくり海社」に電話が入り、「笠岡諸島の6島が協力して行う島ならではのイベントを企画したい、協力してくれませんか」という取材依頼があった。島づくり海社と



「島弁」のパフレット

海援隊が、島ならではのプロジェクトを検討して、たどりついたのが、弁当だった。「駅弁」や「空弁」があるのだから「島の弁当」があってもいいのではないかとの発想からだった。

「島の住民が、島の食材を使って、島で作る弁当」として開発し、名前は「島弁」と名付けた。笠岡諸島6島の島民たちがそれぞれの島の良さを生かして、独自の「島弁」を作る。材料費や人件費はすべて島の有志の自腹。島に来た人たちが6島を巡りながら弁当を食べ歩く、というもので、それをテレビ局が全国放送で中継を行うという企画になった。また、放送後は、各島の有志が、それぞれに開発した「島弁」を販売していこうということになった。

同年3月、各島のプロジェクトリーダーたちが一堂に会して、プロジェクト設立会議を開いた。プロジェクト当日（テレビ放映日）は同年5月29日で、その1週間前には、「島の大運動会」も予定されていたため、非常にハードスケジュールとなったが、島の将来に希望を抱き、6島が競うよう取り組んだ。

1か月前に、各島の進捗状況の報告会を兼ねて、島に駅弁評論家を招き、各島が試作開発した「島弁」の品評会を開いた。各島まだ開発の途中ではあったが、試作した「島弁」を持ってリーダーたちが会場となった高島へ意気揚々と乗り込んできた。どの島のリーダーも「自分の島の『島弁』が一番だ」、「他の島には負けたくない」といった雰囲気だった。

品評会では、各島それぞれの試作弁当に対して、「海のもの、山のもの両方入っていて味もおいしい」、「容器が素敵でインパクトがある」、「島の伝統が伝わってくる」、「見た目がかわいくていい」、「島の特産の石を使った箸はいい」といった良い評価の声が聞かれた一方で、「弁当の中身と島の特徴の関係が分かりにくい」、「容器が良くない」、「これでは普通の家庭の弁当と同じだ」、「自己満足の域を出てない」、「ネーミングがいまひとつ」、「わざわざ島まで行って食べたいと思う弁当じゃない」といった厳しい評価を受けた島の弁当もあった。

「これでは普通の“おばちゃん弁当”だ」との厳しい評価の声に、各島の「島弁」開発に携わった島民たちはガックリと落ち込み、頭を抱えた。当日まで残された時間はあとわずかで、「やるしかない」、「負けていられない。（自分たちの作った弁当を酷評した人を）ぎゃふんと言わせてやろう」と、島民たちは改良に向けて闘志を燃やした。

プロジェクトの2週間前、市内の陸地部から10人を招待して、「島弁お披露目会」を開いた。先日の品評会で一番厳しい評価を受けた島の弁当は、この時には逆に非常に高い評価を受け、皆笑顔で一杯だった。また、この頃には、「島弁」をテレビ放映後にどうやって売り出していくかについて、プロジェクトのメンバーたちは熱い議論を繰り返していた。プロジェクト当日には、各島がそれぞれ100~200食の「島弁」を作り、ツアー参加者が「島弁」を食べながら、島の観光をしたり、テレビのロケに参加したりする3つのコースの観光ツアーを企画した。当初は、人が集まるかどうか心配していたが、定員（450名）を上回る応募があった。

プロジェクトの当日5月29日、大勢のツアー客たちは、朝10時に高島をスタートし、島々を巡って「島弁」を食べ、観光スポットを満喫して、最終の北木島には17時頃に入っ

た。ツアー終着点の北木島「石の特設ステージ」前には、ツアー客約 400 人、北木島の住民や各島からの人たちが約 600 人、合わせて約 1,000 人の人たちが集まった。

ツアー参加者の人たちからは、「島弁」がおいしかったとの感想が聞かれた。そして、最後に、各島のプロジェクトリーダーが舞台に並んで、テレビ局の司会のアナウンサーが「おいしいと思った方は黄色いハンカチを振ってください」と言うと、会場一杯にその黄色いハンカチがはためいた。それを見た島の人たちはうれしくてたまらなかった。プロジェクトが終わり、ツアー客たちが帰る時はちょうど夕日が沈む時刻で、その夕焼けに照らされた 70 隻もの船団の勇壮な姿を島から見た人たちは感動し、あらためて島の誇りと自信を持ったという。

### **“幻の弁当” となった人気の「島弁」**

「島弁」のプロジェクトは、島の“食”をあらためて見直すだけでなく、自らの島を愛する心を育んだ。モノづくりの楽しさも知った。また、プロジェクトリーダーたちは、今回のチャンスを活かして、「島弁」を今後どう売り出していくか、どう事業化していくか、という新たな課題に心を燃やしていった。

その後、「島弁」の名は広く知れ渡り、販売に乗り出すと飛ぶように売れた。同年 6 月、笠岡諸島鮮魚市では、130 個の「島弁」が販売開始から 10 分で売り切れた。岡山市のスーパーのオープンにあわせて 110 個用意した「島弁」は 1 時間ほどで売り切れた。テレビで放送されて以来、毎日のように新聞や出版社などからの問合せが殺到した。しかし、「島弁」をある程度の量、定期的に生産するという体制を島で確立するには、調理場所の許認可のクリア、弁当づくりのスタッフの確保等々、様々なハードルを乗り越えなければならず、爆発的な人気の一方でその供給は全く追いつかない状態だった。そのため、「島弁」はなかなか手に入れられない“幻の弁当”と呼ばれるようになっていた。

その後、「島弁」の人気は根強く続き、島内でのマナコッチハウスでの昼食サービス等のもとより、島の特産品としてアンテナショップ「ゆめポート」などでの販売、「島弁ツアー」などの各種イベントでの販売などを行っている。その他、「島弁」は島の高齢者の配食サービスとしても提供されている。

また、各島で競争しながらより良い「島弁」を作りながらも、販売などではお互いに協力し合うという体制が出来るようになった。

## **6. 島民一体の行政との協働による島づくりの今後に向けて**

### **島民と市職員の協働で島を“価値ある辺地”として活性化**

市の公募職員による「島おこし海援隊」の発足により、笠岡諸島の島で時限的とはいえ、島おこし専属の「人材」（海援隊の隊員）が活躍してきた。職員がそれぞれに理念を持ち、

島での生活にとけ込んでいって、真摯に対応していく中で、信頼関係を築いてきた。情熱を持った市職員と島への熱い思いを持った島民たちとの信頼・協働の関係が生まれ、住民の自治活動が育っていき、一つのモデル的な成果を現した。「10年間に渡って、島民と行政が協力してきたことは大きかった。だからここまで来ることができた。行政だけでも島民だけでもできなかった」とある島民は話す。

市としては今後、この事業の初心のコンセプトを持ち続け、このモデル的な成果を市役所全体に浸透させていくことができるかが今後の鍵だという。また、市では、笠岡諸島の島が「価値ある辺地」として、豊かな自然、温かい島民の人情、ゆったりとした時間の流れなどの島の良さによって、島のハンデキャップを克服できるようにしていきたい、そのためにも今後も協働の島づくりを行っていききたいとしている。

### **今後も移住者の思いをきちんと受け止めたい ～島は嫁を受け入れる大きな家族のようなもの～**

これまで島には多くの人が移住を希望して島を訪問し、実際に60人以上の人が移住してきた。移住を希望してきたきっかけは様々だった。定年退職をきっかけに移住しようという人、海外から戻って、「さてどこに住もうか？」という人、「自分が役に立てる場所」を探して来る人もいた。また、いろいろな苦難を乗り越えて「しがらみのない所で暮らしたい」、「家族とやり直したい」という人もいた。いずれにしても、実際に移住してくる人たちは、これまで生きてきた人生を背負って島に移り住んでくる。

真鍋島に住む「島づくり海社」の女性役員は、いろいろな移住者の世話をしてきた。他人の家庭内のことではあるが、夫婦喧嘩の仲裁までしたこともあった。移住者の子どもたちの学校での成績や家庭での様子もよく知っている。それは、役員として世話をしているということもあるが、人と人が近くて助け合ってきた島の暮らしの本来の姿でもある。

女性役員は次のように話す。「いろんなハンデを乗り越えて、一生懸命頑張っているこういう島もあるんですよ、と知ってもらって、遊びがてらいっぺん島に来てもらいたい。それで縁があったら住んでももらいたい。それが、島のためにもなるし、その人たちのためにもなればいいと思う。2～3年して帰るならそれでもいい。家族を受入れるというのは、本当に大変です。その家族の人生を受入れるわけだから。移住者は“島という大きな家族に嫁に来るようなもの”だから。受入れる側の島としては、移住者の思いをちゃんと受けとめて、もう少し考えてあげないといけないと思う。何家族も受入れてみて、そうひしひしと思う。他の地域では、行政主体で簡単に家も仕事も用意して『ハイどうぞ、来てください』、という方法でやっているところもあるかもしれないけど、笠岡の島はそうじゃない。」